

能登地震

ひずみたまった断層も

専門家解析 今後M7級懸念



能登半島地震の震源域周辺に、あまり動いていない断層や、ひずみたまった断層があり、今後M7クラスの大きな地震や津波の発生が懸念されるとの解析を、東京大地震研究所の佐竹健治教授（地震学）や東北大の遠田晋次教授（地震地質学）がまとめた。

1月1日に最大震度7、M7・6を観測した後も周辺では地震が続いている。同日には震源域の北東端

付近でM6・1の地震があり、新潟県長岡市で震度5弱を観測した。佐竹氏は「（周辺で）さらに大きなM7クラスの地震が発生すると、佐渡島を含む新潟県沿岸で3級程度の津波が予想される」と注意を促す。

能登半島地震の震源域は、半島を北東から南西に横断するように約150キロにわたって延び、北東端は佐渡島西方沖、南西端は半島の西方沖に及ぶ。複数の断層が運動したとみられている。

佐竹氏は、1月1日に各地で観測された津波の波形を基に、今回の震源域と重なる7つの断層がどのよう

にずれ動いたかを分析。半島北側の沿岸部周辺にある四つの断層が1・2・4・1びずれ動いた一方、北東端の二つと南西端の一つはほとんど動いていないとの結果が出た。

遠田氏は、震源域より広い範囲で、M7・6の地震発生前後に、断層にたまるひずみがどのように変化したかを計算。南西端付近の断層や、その延長に当たる石川県志賀町沖の断層、半島南部の同県かほく市から七尾市にかけて延びる「尾知断層帯」などに、地震の影響でこれまで以上にひずみがたまり、ずれ動きやすくなっているとみている。